



筑紫女学園大学リポジット

教員の提示が造形活動に与える影響に関する学生の
「気づき」 : 自分自身の製作物を振り返って

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部 公開日: 2015-10-13 キーワード: 作成者: 吉川, 暢子, 大鶴, 香, YOSHIKAWA, Nobuko, OZURU, Kaoru メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/486

教員の提示が造形活動に与える影響に関する学生の「気づき」

～自分自身の製作物を振り返って～

吉川 暢子・大鶴 香

Effects of Teachers' Suggestions on the Students' Awareness in Modeling Activities —Reflections on Their Own Products—

Nobuko YOSHIKAWA, Kaoru OZURU

1 本論の位置づけ

(1) 研究の経緯

本論は授業における教員の提示方法が学生の製作物に影響を与えたか、さらに製作物を鑑賞し表現への「気づき」を問うものである。

本研究の発端は、平成24年度に実施された「教育方法の研究」の授業¹の一環で「どんぐり」を用いた造形活動である。その授業において幼児教育科の学生を4グループに別け、授業を行った。授業では材料や道具などの環境整備は同じ条件を揃えていたが、唯一、教員の提示方法を変えた。その結果、提示の違いによって、学生の造形的な表現に明らかな差異が現れたのである。²

そこで、本研究では授業における教員の提示方法を変えて造形活動を行い、製作時や製作終了後の振り返りにおいて、製作物に関する学生の「気づき」にどのような変化が起こるのか研究したものである。

(2) 学生の現状

昨今の学生の造形表現において、ものをつくったり、描いたりする際に教員にすぐやり方を尋ねたり、「これでいいか？」などと答えをすぐに求める発言をよく耳にする。このことは、造形活動の際、目に見えない答えを自らが考える前に早急に出そうとし、教員の考えている答えを無意識のうちに求めるのでいるのではないだろうか。その要因として情報メディアの氾濫により画一的な方法論に慣れ、答えを求めすぎている。つまり、想像力が低下し自由な発想やイメージが生まれにくい現状がある。また、失敗を恐れて頭の中で思考するだけにとどまり、実際に手を動かして体験するという経験が減少しているということも要因の一つと考えられる。

子どもが豊かな表現を獲得する為には、保育者による適切な指導や援助が不可欠である。将来、保育者となる幼児教育科の学生に、子どもの表現を豊かに保障するために学生自身の「表現」に対する考えについて、捉え直す必要があると考えている。

2 「どんぐり」を用いた製作の実践の概要

(1) 本実践の目的

この授業の目的は、「どんぐり」を使って保育に関する内容を発想すること、頭の中で考えることだけでなく、実際に身体を動かし、考えて行くことである。

(2) 使用する材料と道具【共通】

材料：どんぐり(くぬぎ、マテバシイ、あらかし、うらじろがし、しらかし、すたじい、こなら)、まつぼっくり、紙粘土、モール、綿、フェルト、スパンコール、爪楊枝、竹串

道具：はさみ、木の実穴あけ器、ペンチ、ポスカ、マジック、キリ、油粘土、ホットボンド、アルミホイルなど



写真1：どんぐり



写真2：まつぼっくりなど

(3) 提示内容【共通事項】

製作するにあたって準備した材料や道具は、すべて同じものである。

- ・「どんぐりを使って何か作りましょう。何でも良いですよ」と活動開始時に提示する。
- ・製作時には、基本的な道具の使用の仕方や注意事項を説明する。製作過程での方法の疑問や相談については、個別に援助する。
- ・あらかじめ準備した材料や道具以外で希望するものに関して、個別に追加で用意する。
- ・授業時間内(約1時間)の中で製作すること
- ・保育室の飾りなどでも良いこと。
- ・必ずしも子どもと一緒にしてくれるものではなくてもよい。
- ・まつぼっくりも使用可(ただし、一人一つまでと制限)³
- ・製作に関しての感想をワークシートに記入する。
- ・製作終了後、グループ内において、発表を行う。

(4) 実施計画

製作するにあたって、準備した材料、道具は毎回同じものである。

授業の際、教員の提示の仕方や材料や道具の使い方の説明方法を変えている。提示内容の違いは以下の通りである。

表1 各グループの実施計画

グループ	実施日	受講者数	提示内容の違い
1	H25. 12. 7	23名	自由に製作
2	H25. 12. 12	27名	紙粘土の使い方（着彩）を取り上げて説明
3	H25. 12. 19	25名	接合方法を取り上げて説明
4	H26. 1. 9	26名	参考作品を提示

(5) その他

学生に対して製作物を友人に見せないこと、画像をSNSなどに掲載しないように注意喚起し、製作物の情報やイメージが他のグループに漏洩しないようにした。持ち帰る場合も、中身が見えない袋に入れて持ち帰るように指示した。

3 「どんぐり」を用いた製作の実際～学生の製作物から～

授業での教員の提示方法と学生の製作物を比較分析する。⁴

(1) 第1回製作グループ（実施日：H25. 12. 7）

第1製作グループにおいては、自由に製作することを目的とし、材料の紹介や道具の使い方や注意点について、説明を行った。以下25点である。



写真3：第1回製作グループの作品一覧

(4) 第4回製作グループ（実施日：H26. 1. 9）

第4回製作グループにおいては、まず2点の参考作品を提示した上で、材料の紹介や道具の使い方や注意点について、説明を行った。以下26点である。



写真6：第4回製作グループの作品一覧

3 各グループでの製作物に見られる表現の差異

(1) 第1回製作グループ（実施日：H25. 12. 7）

第1製作グループにおいては、自由に製作することを目的とし、材料の紹介や道具の使い方や注意点について、説明を行った。特に見本の提示は行わなかったため、学生が製作に取り掛かるまでの時間については、4グループの中で一番要している。また、製作が始まってから、一人の学生が「画用紙」が欲しいと申し出たため、白い画用紙を個別に用意した。その後、他の学生もその白い画用紙を希望し、製作物に用いていた。画用紙を用いた製作物は12点見られた。

(2) 第2回製作グループ（実施日：H25. 12. 12）

第2回製作グループにおいては、材料の紹介や道具の使い方や注意点の中で、特に紙粘土の使い方を取り上げて説明を行った。紙粘土についても、紙粘土への着彩方法として、紙粘土に水彩絵の具を入れ、混ぜ合わせるという方法を提示した。よって、紙粘土について、白い紙粘土のままで使用しているものは少なく、着色された紙粘土を使用している製作物は19点見られた。

(3) 第3回製作グループ（実施日：H25. 12. 19）

第3回製作グループにおいては、材料の紹介や道具の使い方や注意点の中で、特に竹串や爪楊枝を用いた接合方法を取り上げて説明を行った。どんぐりに穴をあけ、竹串や爪楊枝を用いた接合方

法を行っている製作物が14点あったが、ホットボンド等でどんぐりをつなぎあわせるという接合方法を用いた製作物も多数あった。

接合方法という技術面の説明において、製作における作品のイメージが湧きにくく、その技術(ここでは接合方法)の難しさや面倒くささを感じると、説明時の接合方法を行うことを回避したようである。

また、フェルトを用いた製作物が18点見られた。さらに、製作物のテーマや色の配色が季節のイベントに即したものが多く見られたのも、このグループの特徴である。

(4) 第4回製作グループ(実施日：H26. 1. 9)

第4回製作グループにおいては、まず参考作品を提示した上で、材料の紹介や道具の使い方や注意点について、説明を行った。見本の製作物はどんぐりやまつぼっくりを竹串や爪楊枝で接合し、フェルトや紙粘土は全く使用していない。学生の製作物について、モールや紙粘土、フェルトを使用したものはあるが、全体的に素材そのものを生かした製作物が多い。また、見本の要素が入った製作物が26点中22点見られた。

また、見本の接合方法は第3回製作グループと同じ接合方法であったが、学生は難しさや面倒くささを感じることなくほぼ全ての製作物に、この接合方法を取り入れていた。



写真7：提示した見本の作品(2点)

4 どんぐりを用いた製作における学生の気づき～ワークシートの記述から～

「教育方法の研究」で行ったどんぐりを用いた造形活動の授業がすべて終了し、次学年(二学年)に開講されている「発達心理」(大鶴担当)の授業の中で振り返りを行った。(実施日：H26. 4. 29)

(1) 授業後の振り返りの手順

授業後に以下の手順で製作物を写真にて鑑賞後、提示の方法が違うことを説明し、以下の内容についてワークシートに記入する。

- ① 全員分の製作物をグループごとに1人分ずつ写真にて鑑賞し、感想を書く。
- ② グループごとにまとめた製作物の写真を鑑賞し、感想を書く。
- ③ 各グループごとの教員の提示の方法を伝え、再度グループごとの写真を見せ、感じたことを書く。
- ④ 自分の製作物をつくった時のことを思い出し、影響を受けたことがあれば書く。
- ⑤ 子どもの表現の豊かさについて、教員が事例をあげて話す。
- ⑥ 授業を受け、考えたことを書く。

(2) ワークシートから見る学生の気づき

全員の製作物を一人分ずつ鑑賞した後の学生の感想（原文のまま）を抜粋して表2に示す。

表2 一人ずつの作品を鑑賞した後の感想

A	同じ状況での製作なのにアイデアがいっぱいあってすごいと思いました。似たようなものはあったけど全く同じのなんてないし、自分では思いつかないのもあってすごいと思いました。材料は同じでも見方や考え方を変えることで色々な種類のものを作れるんだと感じました。
B	どんぐりというひとつのテーマの中でみんながそれぞれ違うものでとても可愛かったです。ひとりも誰かの作品と全く同じものがなく、アイデアや想像力がすごいと思いました。
C	使っている材料は同じなのに全く違うたくさんの種類がありました。「どんぐり」という課題だけで、こんなにたくさんの発想があって表現の仕方があると少し驚きました。
D	全員が同じ条件の中で製作をするという活動でしたが、一つひとつ全然違う作品が出来ていたので、皆の作品を見ることが出来てすごく良かったし、一つも同じものがないということを実感し、すごいと思いました。保育所や幼稚園で同じ条件で何かを提供し活動を促しても、きっと私たちと同じように、皆違うものが出来るだろうなと思いました。
E	100個以上作品があるのに、1つも同じものがなくて面白いと思いました。どんぐりの使い方も個性があってどんぐり自体で作る人やどんぐりを何個も使って絵にしている人などがいて、新しい発見がありました。みんな違う考えをしていることがわかりました。
F	ひとつめのスライドショーはほとんど画用紙のようなものを使って大きめのものを作っていたように思う。またその他のスライドショーもグループごとに作っているものが似ていたり、まつぼっくりにどんぐりをのせたり、紙粘土の上にどんぐりをのせるなど、構成も似ているように思いました。

AからEのように、全く同じ製作物がないことや人数分のアイデアがあることへの気づきが見られ、同じどんぐりと言う素材を使っても様々な表現の形があることに言及していた。Fのようにグループごとに似通った傾向があることに気づいたのは102名中3名のみであった。

次に各グループごとにまとめた製作物の写真を見せた後の感想を抜粋して表3に示す。

表3 グループごとにまとめて見た時の感想

A	ばらばらに見たときはたくさん種類があると思ったけど、まとめてみると似ているような作品が多いと思いました。グループごとには全く違う作品だけどグループ内ではまとまっているから、無意識にそうなるのかと思いました。
B	回毎に似ていると思いました。友達と話して作ったりしていることでこうなるのかなと思いました。
C	同じ週に作った人同士の作品は似たような出来上がりだけれども、他の週と比べると違う気がする。
D	どういう風に指示を受けたかは覚えてないけど、同じ回数同士の作品が似ているので、指示の受け方で作品が変わってくるのかなと思った。

E	同じグループで似たような作品を作っていた。特に4グループがまつぼっくりを使っている傾向があつて比較的小規模な作品だった。しかし、画用紙を使って大きめの作品を作っているグループも見られた。全体的にグループで似たような作品が多かった。
---	---

1人ずつの作品を見ていた時には多様な製作物があることにしか言及していない感想が多かったが、グループ毎にまとめたものを見せた後では、学生は1グループから4グループまで各回ごとに似たような特徴を持つ製作物が多いことに気づいていく。この時点で教員からどのような指示を与えたかは伝えていない。それでも学生自身がグループごとに似通った製作物が多いことに自ら気づいていくことが出来ている。

その後、提示の方法を変えていたことを伝え、再度グループごとの製作物を見てもらい、感想を書いてもらった。抜粋したものを表4に示す。

表4 提示の方法を伝えた後の感想

A	作品を作る前に何らかの方法を伝えることでその説明が残っていて「何でも作っていい」と言われても無意識に似たようなものを作ってしまうのだと思いました。また、誰か一人の案で周りの人が同じような作品を作ってしまうのも、何を作るにしても見本があると作りやすいからだと思います。
B	以前見たことがあるものの印象だったり、先生に教わったことをそのまま活用してみたりと、意識したつもりはなくても、影響してしまうものなんだと思いました。ある意味素直ですが、人はやはり人の言葉や印象に左右されてしまうものなのかと感じました。
C	先生の言葉によって、どんな作品を作るのかメインにする部分が変わることに驚きました。そして、先生の言葉の影響力というのはすごいと思いました。提示の方法が違うだけで各自のアイデアの幅が縮められたようにも感じました。そして各回で似たような物を作っていたので、他の人の作品も参考にしながら自然とつくっていたのかなと思いました。
D	どの回でも提示された通りにやっていたりして同じような作品が多くなっていった気がします。私達でも提示された通りに作るのだから、子どもたちだったら本当に真似してそっくりのものを自分が出来るレベルで作るだろうと思いました。

この時点で、学生は自分のつくったものが、直前の教員の言葉や働きかけや見た製作物、友達のおつくっているものなどに影響を受けていた可能性に気づいていく。実際に自分がつくった時のことを思い出し、影響を受けていたことがあれば書いて下さいと指示したところ、第1グループは友達がしていた土台を真似してつくっていきこうとしたことが書かれていた。第2グループでは紙粘土に絵具を混ぜるという方法を「してみたかった」と言う表現が多く見られた。第4グループでは教員が見本として提示した製作物を見た際に、それが頭から離れず他のイメージが広がらなかったという記述が多く見られた。

その後、授業の感想について書いてもらった。抜粋して表5に示す。

A、C、F、Gのように教員の言葉や行動が子どもの作品の幅を広げることもあれば、狭めることもあることに言及したもの、BやEのように子どもの発想を受け止めることが大事だということに言及したのが見られた。また、自分の言動が子どもに大きな影響を与えること、さらに保育者として子どもにどう働きかけていくかを考えていくものなども見られた。

表5 授業の感想

A	表現の仕方にはそれぞれあって、自分の今までの体験などから変わるのだなと思った。指示された人からのアドバイスによって広がったり狭まったりして作品が変わっていくと分かった。
B	私たちが周りの人や物に影響を受けるように、子どもの表現にも周りの環境はとても大切であると感じました。子どもの表現をしっかり受け手として受け取り、拒否するのではなく、その感性を受け入れることによって子どもの表現は豊かになっていくのだと思いました。
C	作品を作る前の説明の仕方や見本によってデザインが変わることが分かり、どこまで話をするのか、例を出すかということは作品の可能性を広げることも狭めることも出来るということを知り、なるほどと感じたとともに、設定保育等も取り組む作業だけでなく、その前も重要だと感じました。
D	同じ場所や時期で作った作品には同じような特徴がある。先生になる私たちのひとつの見方や考えを押しつける教育はやっぱりだめだと思いました。
E	作品は出来上がったものだけでなく、作る過程もとても大事なんだと学びました。私は今まで出来上がった物が全てと思っていたので、上手く出来ている、きれいに出来ていることが大切ではないんだなと思いました。また、子どもが持っている発想は私たちよりもとても豊かだということを知り、周りの大人がその子どもの豊かな発想をどうとらえるのかどう受け止めるのかがとても重要なのだととても考えさせられた授業でした。
F	今日の授業では、人間は周囲の物や人が言ったり、実際に提示してもらったものの影響を気づかないうちにたくさん受けているのだと実感しました。これから子どもたちを相手にしていく私たちにとっては、先生の見本によって、子どもの発想を広げたり、逆に狭めてしまうことがあるということを頭においておきながら、子どもと関わっていくことが大切だと思いました。
G	「自由に作ってください」と「見本を出す」では、出来る作品も変わるということが分かりました。見本を見せるということは、表現する人からすると想像力が狭まることも大きいと分かりました。私は見本を出した方がよいと思いました。この授業を受けて一人ひとりの子どもが持っている表現で作るということも大切ということを知り、次の実習でもそれをふまえながら考えていこうと思います。

(3) 授業全体を通して

以上、いくつかの質問に対する学生の気づきについて述べてきたが、今回の授業を通して、学生が感じたことは大きく以下の3つに大別できると考える。

一つ目は同じ題材を使っても様々な製作物が出来るということである。同じ材料であってもつくりようとする物は一人ずつ違うこと、様々な発想があることなどを学んでいる。保育所保育指針解説書の保育の内容「表現」の中で、「保育士等は、子ども一人一人の表現を受け止め、そのおもしろさや発想の豊かさに共感し、その工夫を十分に認め、子どもの表現することの楽しさを味わっていくようにします」とある。学生同士の製作ではあるが、同じ材料や道具を用いても、学生一人ずつの豊かな発想や表現形態があることを身をもって体験できたといえる。

二つ目は教員の働きかけによって製作物が影響を受けるということである。学生が設定保育を考える際に、見本を見せる等して興味を喚起することは大事なことである。しかし、見本を見せる事で、子どもの表現の幅を狭めることにもつながる可能性もあるということに気づいていた。ある学生の感想では自分の実習で設定保育を行った際の出来事について「見本として作ったうさぎをモチーフにした作品を作っている子どもが続出したこと」さらに「見本として出すのもいいけど何も見ることなく子どもたちが作品作りに取り組むことが出来れば沢山の新たな発見がありそうだ」と自分の保育を振り返りながら考えている学生もいた。

三つ目は上記のことをふまえ、保育者として子どもにどう関わるかという視点を述べたものであ

る。「きれいに出来ること」や「皆と同じものが出来ること」が大切なのではなく、子どもが自由に表現できることを大切にしていくことも大事であること、さらに子どもの表現を保育者が受け止めることも大切であるということに気づいていったといえる。

5 「どんぐり」を用いた製作からみる授業の意義

どんぐりやまつぼっくりは人工的につくられた造形素材ではない。いわゆる自然物である。可塑性も低いものではあるが、自然物が持つ温かさ、におい、感触、模様など子どもの五感を刺激するものである。どれ一つとして同じかたちや色が無いということも、子どもの興味・関心や表現を引き出す欲求の基となり、創意工夫へとつながる。

学生の製作物の中で「トトロ」(宮崎駿監督の映画『となりのトトロ』)のキャラクターの一部をモチーフにした製作物が多数見られた。その製作物に関しては、過去の経験としてどんぐりを用いて「トトロ」を製作した記憶があったようである。



写真8・9・10:「トトロ」をイメージした作品(第1・2製作グループから抜粋)

このことから、製作物に見られる造形的な表現は、今までの経験からイメージが生み出される可能性が高いということである。また、この実践を通して、学生の経験として「どんぐり」を用いて造形活動を行った経験が蓄積されていく。このようにどのような造形的な経験を積むかによっても、学生の製作物に影響が現れるであろう。ここでは、その過去の経験をもとに「つくって楽しい」「かわいい」という思いが具体的なイメージに結びついていたといえるだろう。よって、製作する過程において、「つくりたい」という思いを抱くことが豊かな表現に結びつく可能性があるといえる。このことから想像力を働かせて創造活動を行うには、どのような経験をするかが表現につながっていくのである。このように日々、行っている造形活動において子どもに求めているものは目に見える評価としての「現れ」ではなく、友だちと関わり合いながら、素材と触れ合い五感を働かせていく「表し」こそが表現において必要となるのである。

だが、本論のはじめにも述べたように、現在の学生は「現れ」の結果を求めていることが多いのである。だからこそ、つくる過程やその過程においてのさまざまな影響を、自らの体験をもって考えることは、とても意義があったといえるだろう。

ここでいう「表現」について、槇英子は表現する行為である「表し」と表現されたものである「現れ」の両方の意味が含まれているとし、「通常“豊かな表現”というと、目に見える作品が立派で

あることを意味するように思われますが、結果である「現れ」を豊かにすることが保育の場において目指すことではありません。過程である「表し」に着目し、その背景を含む全体を「表現」ととらえる視点が求められる⁵としている。

この実践の体験を通し、学生は提示の方法によって表現を広げることもあれば狭めることもあること、製作物に個性があることから一人一人の表現を大切にすることを学んだといえる。

また保育者となった際には、保育者が計画を立て、保育を行う「設定保育」を行うことがある。この「設定保育」について、鯨岡峻は子どもの主体的な活動としての遊びに反した保育者主導の「設定保育」が、現在でも横行している現状を危惧している⁶。

子どもにとってもものをつくったり、描いたりする造形活動は、子どもの想像力や感性にもとづくだけでなく、ものをつくる過程においてかかわり合うさまざまな他者（自分の親や他の子ども、素材や描画材、そして自らつくりだしたものや描いたものなど）から影響を受けることで、自らの想像力や感性を広げ深めることができる。

つまり、さまざまな他者とのかかわり合いは、創造活動に不可欠な想像力の育成に重要な役割を担うものと考えられるのである。造形活動を積極的なものにするためには、自分の発想やイメージをもつことが必要である。そして、そこには想像力が働いているといえる。この想像力は、あらゆる創造活動の基礎となるものであるといわれている⁷。

だからこそ、保育者が子どもの表現を支え、どう受け止めるかが重要になってくるのである。

6 おわりに

本論は授業における教員の提示方法が学生の製作物に影響を与えたか、さらに製作物を鑑賞し表現への「気づき」を問うものであった。

造形活動をするにあたって、ものをつくったり、描いたりする造形活動の行為を結果で見のではなく、行為の過程をみることが重要である。学生をつくる過程において、つくるという行為が表層的な綺麗さや良さを求めるのではなく、五感を働かせ、つくる過程を楽しむことによって、子どもがものをつくる過程において重要であることが身をもって体感できたと言えるであろう。

さらに、保育者として子どもに関わる際に、教員の言動が子どもの表現に多大な影響を与える可能性があることに気づく契機になったといえよう。

【注】

- ¹ 「教育方法の研究」とは幼児教育科一年生を対象とした後期の授業（卒業及び保育士・幼稚園教諭免許必修科目）である。幼児教育科の担当教員（8名）が2名ずつペアになり「遊び」「実習日誌の書き方」「教材研究」「製作物」をテーマとして授業を行った。受講する学生は4グループに分かれ、オムニバス形式で受講する。吉川・大鶴は「製作物」を担当し、「どんぐり」を用いた授業を実施した。
- ² H24に実施した実践で見られた学生の製作物の差異や教員の提示方法の違いについて、2014年5月17日に行われた第67回日本保育学会（於大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学）でのポスター発表「提示の方法が学生の表現に及ぼす影響」（吉川暢子・大鶴香）を行った。

- ³ 美術教材カタログ（BSS）で購入したもの
- ⁴ 学生の製作物の画像に関して、製作物を撮影する際に学生に机上においてもらったものを一まとまりとし撮影を行っている。その為、一枚の画像の中に数点写っているものもあるが、それは1作品として数えている。また、同一作者でも、場所を分けておいたものに関しては、別作品として数えている。
- ⁵ 槇英子、『保育をひらく造形表現』、萌文書林、2008、p.9
- ⁶ 鯨岡峻・鯨岡和子、『よくわかる保育心理学』、ミネルヴァ書房、2004、pp.130-131
- ⁷ 吉川暢子、『「ものづくりの場」における子どもの表現に関する実践学的研究－親子のかかわりを中心とした他者関係を軸として－』、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（博士論文）、2012、p.24

【引用・参考文献】

- 鯨岡峻・鯨岡和子、『よくわかる保育心理学』、ミネルヴァ書房、2004
- 鯨岡峻、『なぜエピソード記述なのか』、東京大学出版会、2013
- 槇英子、『保育をひらく造形表現』、萌文書林、2008
- 吉川暢子、『「ものづくりの場」における子どもの表現に関する実践学的研究－親子のかかわりを中心とした他者関係を軸として－』、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科（博士論文）、2012

（よしかわ のぶこ：幼児教育科 講師）
（おおづる かおる：幼児教育科 准教授）